

ポール＝アンドレ・ローゼンタル「「ミクロ」によって「マクロ」を創り上げる ーフレデリック・バルトとミクロストリア」

Paul-André Rosental, “Construire le 'macro' par le 'micro': Fredrik Barth et la microstoria”, in Jacques Revel (ed.), *Jeux d'échelles: la micro-analyse à l'expérience*, Gallimard: Seuil, 1996, pp. 141-159.

紹介

イタリアの社会的ミクロストリアの方法に関する考察。この方法は、多角的アプローチと混同されることがあるが、著者はフレデリック・バルトの議論を参照することで両者の違いを説明している。社会的ミクロストリアとは、諸々の行動を、その頻度にかかわらず（統計上の少数と多数は同じ地位にある）、「同じ」プロセスで説明できるような生成モデルの構築を目指すアプローチである。

○導入部：「多角的アプローチ」と「ミクロストリア」¹

- ・「多角的アプローチ」(approche multiscopique)と「ミクロストリア」の形態は似ているが、それらは一つに収束するようなアプローチではない。多角的アプローチでは、歴史家が生み出す知識はスケールの選択と結びついており、アプローチの角度を増やすことが歴史学にとってもっとも豊かな資源になると考えられている。どの分析スケールも、それ自体が特権的な分析力をもっているわけではない。多角的アプローチが「ミクロ・社会」レベルに特別な関心を向けるのは、そのレベルが本質的に優位性をもっているからではなく、現代の社会史において相対的に無視され、少なくとも一時的には疎外されていたためである。
- ・それに対して、ミクロストリアの場合、スケールはもはや価値中立的な仕方では扱うことのできる道具ではない。ミクロという特定の平面を必ず優先しなければならない。なぜなら、有効な因果関係のプロセスはこのレベルにおいてこそ作動しているからである。
- ・一見似ているようでも、「多角的アプローチ」とイタリアの社会的ミクロストリアは、互いに還元不可能なアプローチである。この仮説を発展させるために、著者はミクロストリアを支える理論的な基盤のさらなる探求を試みる。そのために注目するのが、イタリアのミクロストリアに深い影響を与えたノルウェーの人類学者フレデリック・バルトである。
- ・イタリア人は自分たちのアプローチの理論的な面を体系的に示すことに消極的であった。それに対して、バルトはモノグラフ的な研究と並行して理論についても述べていた。
- ・例えば、ミクロストリアの「古典」のひとつであるジョヴァンニ・レヴィの『無形の遺

¹ 小見出しのタイトルはレビュー担当者が付した。

産』で用いられている重要な諸概念(限定された合理性、不確実性、規範システムの非一貫性、可能性の空間、非決定的な因果関係、社会形態の連続性)は、バルトの研究を参照することによって、その理論的基盤を再発見し説明することができるようになる。また、レヴィが考えていた歴史実践の概念、歴史学を実験的学問として構築したいという願望、観察に与える地位、統計を用いるときの方法なども理解することができるようになる。さらに、もっとも有名でありながらもっとも曖昧なミクロストリアの概念のひとつである「例外的な正規」についても、正確な内容を与えることができるようになる。

○バルトの理論立て

- ・著者が取り上げるバルトの研究は、ノルウェーの漁師の集団に関するある観察結果を対象としたもので²「ある村のコミュニティの漁船は、漁に出るときに海でどのように分散するのか」という問題に焦点を当てている。ここで、次の二つの問いが観察者の興味をひく。
 - ①漁船のほとんどが集団で隣り合って漁をしているのに対し、少数の漁船だけが孤立して漁をしている。この二つの正反対の行動と、それぞれの頻度をどのように説明すればよいのか。
 - ②「主要な」やり方〔漁船が集まって漁をする方〕は、漁の対象であるニシンの群れが予測不可能な移動をすることにまったく適していない。
- ・バラバラに漁をした方がニシンの群れに遭遇する可能性は高い。直接的な利益に反する選択がおこなわれるとき、それをどのように説明すればよいのだろうか。
- ・まず、たとえ少数派であったとしても行動にバリエーションがあることを考慮するならば、集団のすべてのメンバーに課せられた構造的な説明で満足することはできない。つぎに、(集団で漁することによる)多数派の態度は効率的ではないため、機能主義的な理論立てを用いることもできない。
 - 要するに、この場合、構造主義的な説明も機能主義的な説明も有効ではない。
- ・バルトのアプローチは、次の三点において構造主義的、機能主義的アプローチと異なっている。
 - ①規範システムは一貫したものではない
 - マクロ構造的なアプローチは世界が規範システムにより統合され支配されているというビジョンに基づいており、規範システムがあらゆるミクロな決定に直接かつ明確に影響を及ぼすと考えている。バルトは反対の視点から出発し、社会的世界は完全

² F. Barth, "Models of Social Organization I", *Process and Form in Social Life*, London, Routledge & Kegan Paul, 1981, pp. 32-47.

に統合されているわけではなく、すべての規範システムは非一貫性によって断裂(fracturés)していると考えている。この視座からすれば、行動はもはや規範に従うことの機械的な結果ではない。

②資源の配分における社会の異質性への注目

バルトは、社会の同質性の形態を強調するのではなく、資源の配分においてどの社会にも存在する異質性に注意を払っている。各個人は自分の置かれた状況に応じて行動するが、そうした状況は自らが自由に使える資源(物質的資源だけでなく文化的資源も)に依存している。社会的行動は、単に規範システムに機械的に従属しているわけではない。社会的行動を説明するには、研究対象となる集団のメンバーそれぞれの個別の位置を考慮しなければならない。

③社会的世界の観察単位としての人びとの相互作用(interaction)

「交互作用」(transactions)がバルト的なモデルの観察単位となる。バルトにとって、その関心は二つある。

1. 彼は交互作用とは個人が決定を迫られる状況のことだと考えている。発見的な視点から個人の決定のプロセスを調べることは、研究対象となっている社会で機能しているメカニズムを理解する最良の方法のひとつであると思われる。しかし、バルトはこの分析モデルがすべての人間行動に適応できると考えているわけではない。バルトが注目しているのは競争や争いが生じている状況である。
2. あらゆる社会関係に生じている不確実性を明るみに出すこと。バルトにとって、社会的行動の大きな特徴のひとつは、そうした行動の結果が他の人びとの並行した行動、あるいは反応に依存しているということである。そのため、あらゆる行動の結果について不確実性が生じ、個人はそれを考慮することになる。行動の影響を予測するのに、個人は抽象的に規範システムに頼ることはできない。

○プロセスに焦点を当てる

- ・これら三つの大きな理論的方針は、結局のところ研究の対象をずらすことになる。通常、マクロ構造的なアプローチでは、行動は一連の規範の直接的かつ明白な表れとして認識されている。そして、同一の行動は、同一の原因の同一の結果として考えられている。
- ・それに対して、規範システムが一貫しておらず、その結果も自動的に帰結するわけではないという考え方から出発すれば、ある行動はある個人がある状況に対して行った特定の反応にほかならない。形態的に同じである二つの行動は、実際には異なる状況で考え出されたものかもしれないし、形態的に異なる二つの行動は、同じ状況で考え出されたものかもしれない。ここで決定的なのは、個人が状況を利用するということである。つまり、形態的な行動ではなく、そうした行動を生み出すプロセスに焦点を当てるこ

とが重要である。

○ゲーム理論の活用と「価値」

- ・バルトはフィールドワークを行ないつつ、このビジョンに適合する研究プログラムをつくり出し、分析の道具を考案していった。その際に、役立ったのがゲーム理論である。この理論によってバルトは、自分のアプローチにとって重要ないくつかの目的を調和させることができた。それらはつまり、1. 自ら選択する能動的で合理的な個人を描くこと。2. そうした個人に重くのしかかる束縛と限界とを説明すること。3. こうした束縛をミクロなスケールに結びつけること。4. 個人間のやりとりのレベルでの不確実性は、集団のレベルでの行動の規則性と両立可能であることを示すこと、であった。
- ・実際、ゲーム理論は上記のような理論的原則を定式化している。つまり、個人を選択や決断のプロセスの中で捉えるのである。そうした選択や決断は、個人の資源と束縛にだけでなく、他の行為者が並行して行う行動や反応の予測（不確実な状態において）にも基づいている。個人の行動は機械的に決定されるものではなく、各人が与えられた状況下で利用できる操作の余地（可能性の宇宙）を反映しているのである。
- ・しかし、こうしたアプローチは個人の全能性というユートピアの上に成り立っているわけではない。行為者に開かれた可能性は常に有限だからこそ、研究者にとってアクセス可能なものとなるのである。一般的に、個人が操作できる空間は非常に限られているだけでなく、必ずしも有効なわけでもない。つまり、個人がそれを認識できなかったり、間違って評価していたり、単に使わなかったりすることもありうるのである。ここでは、「可能性の幅」(gamme de possibles)という概念が重要である。
- ・最後に、個人間のレベルでの不確実性は、集団のレベルで規則性が表れることを妨げることはない。不確実な状況に対する最適な「解」を決定することが、まさにゲーム理論の主要な目的の一つなのである。
- ・ゲーム理論から借用したこの一般的な理論的土台の上に、バルトは社会分析のモデルを構築した。その鍵となるのが、ミクロとマクロのスケールの関係の基礎として導入された「価値観」(valeurs)という概念である。簡単に定義するならば、価値観とは行為者にとっての利益や損失が意味する内容を定義するものだと言うことができる。この価値観がパラメータを構成し、それに応じて形態的な戦略的規則(règles stratégiques formelles)が変化することになる。
- ・この価値観という問題設定によってバルトの研究が理解できるようになる。「競争」が生じている状況を観察する研究者は、まず行為者が行った選択を検証しなければならない。特に行為者が有する資源と彼らに重くのしかかる束縛を明確にすることで、行為者の選択を彼らが組み込まれている個別の図柄・関係態(configurations)に結び付けなければならない。こうすることで、個々の判断で考慮されたであろうパラメータとしての

価値観を発見することができるようになる。

- ・こうして、研究者はゲーム理論から導き出された抽象的な戦略的規則に明確で経験的な内容を与えることができ、経験的状况を因果関係の仕方で説明することができるようになる。バルトの目的は形態を単に記述することではなく、プロセスを特定することによって生成モデルを明らかにすることである。

○ノルウェーの漁業の例

- ・以上のことをより具体的に理解するため、既に言及したノルウェーの漁業の例に戻る。まず、これまでに述べてきた方法論にしたがって、用語を再定義することができる。
 - ①研究の目的は、漁船の「観察された配置」(distribution observée)を分析することである。
 - ②この分析には、因果関係的な内容がなければならない。重要なのは、観察された「形態」(forme)を生み出した「プロセス」(processus)を説明することである。
 - ③研究者は、確認されたバリエーションの「すべて」(totalité)を説明しなければならない。論理的な観点からは、統計上の少数派の行動は多数派の行動と同じ地位にある。
 - ④これらの多様な出来事は、その頻度にかかわらず、「同じ」(mêmes)プロセスで説明しなければならない。つまり、因果関係の連鎖の中の「一つの」(unique)節は、現象全体をあらゆる異質性のうちに理解するのに利用されなければならない。
 - ⑤出来事の頻度は説明モデルを制限するものとして機能する。また、それは研究者によって明らかにされたプロセスの妥当性の確認 (validation)という機能を持っている。
- ・漁船の配置の問題〔漁船のほとんどが集団で隣り合って漁をしているのに対し、少数の漁船だけが孤立して漁をしている〕は、船長、投網師、漁師という三者の相互依存関係を検討することで説明される。三者はそれぞれ、必要とされる仕事の能力を自分が持っていることを示そうとする。漁の成果は非常に不確実なものであるため、三者のやりとりは、利益のチャンスを増やすためにそれぞれに想定される能力についての真の交互作用となる³。
- ・ここから、漁船の空間分布に関する規則が現れる。船長は、自分の漁船の位置について常に判断することを迫られている。彼は集団で漁をするよりも、単独で漁をした方が利益の可能性が高いことも知っている。しかし、単独で漁を行う判断を下すには、漁師からの巨大な信頼を確保しておく必要がある。というのも、船長が質の高い漁師を集めるためには信頼が重要（漁師との契約は二か月ごとに結ばれる）であるが、単独で漁をした場合に失敗すると、集団的な漁の失敗よりも厳しく判断されてしまうからである。ニ

³ 〔要するにこの三者は、利益を増やすために、自分が漁で必要とされる能力を持っていることを示そうとし、相手にもその能力があるかどうかを評価しようとするのである〕。

シンの群れの移動ルートの不確実性と信頼の問題の重要性を考慮すれば、ほとんどの船長はもっとも慎重な解を選択することになる。つまり、ニシンよりも信頼を選ぶのである。この論理から逃れることができるのは、もっとも尊敬されている船長だけである。

○バルトのアプローチとミクロストリア

- ・バルトのアプローチとミクロストリアのアプローチには、非常によく似た特徴がある。ジョヴァンニ・レヴィの研究がこのことをよく表している⁴。
- ・レヴィの研究はまず小作人の三つの家系の歴史を記述するところから始まる。レヴィは収集した観察結果に意味を付与することができるプロセスモデルの構築を目指した。この点では、彼がその歴史を紹介する三つの家系は、決して「代表的」な性格を持つものとして選ばれたわけではない。ただ、それぞれの家の軌跡が、その特異性の背後に、歴史家が解決しなければならない問題を具体的に明らかにすることを可能にするのである。これらの「家の歴史[...]」は、ほとんど公証人の記録から再構成されたもので、典型的な状況を再現することを意図したものではなく、モデルの構成要素を明らかにするものである⁵。
- ・そのため、バルトと同じように、レヴィは説明すべき形態の幅(*la gamme des formes à expliquer*)を探し出すという課題を設定し、観察結果を収集していく。この多様な観察結果を、それらを生み出す一つのメカニズムへと集約させるのである。
- ・バルトと同じように、レヴィは観察されたすべての構成要素に等しく注意を払う。あらゆる形態はその頻度にかかわらず、ア・プリオリに同じ論理的な重みを与えられなければならない。
- ・レヴィは、観察された形態のすべてを説明することができる生成メカニズムの幅を特定しようとする。レヴィの実際の研究では、それは八つの原則で構成されている。こうした原則はすべての家族集団を特徴づけ、社会的地位や特定の状況に応じて無限に変化していく(*se déclinent*)。
- ・具体的に観察されたそれぞれの家族形態は、特定されたメカニズムの範囲のなかの組み合わせを構成することになる。レヴィの場合、類型論的なアプローチとは対照的に、観察された家族形態は潜在的にはどれも連続的である。これらの家族形態は、ア・プリオリに別々のカテゴリーに分けられるのではなく、共通のプロセスの結果として生じている。理論的には、近接性の度合いに応じてすべての可能な家族形態を並べた連続する弧を描き出すことができる（とはいえ、すべての可能な家族形態が観察結果に実際に存在するとは限らない）。

⁴ G. Levi, *Le Pouvoir au village. Histoire d'un exorciste dans le Piémont du XVIIe siècle*, Paris, Gallimard, 1989 (1re éd. Turin, 1985), pp. 53-95 (chap. 2).

⁵ *Ibid.*, p. 65.

- ・「奇妙な」(étranges)、「例外的な」(exceptionnels)ケースも、この原則の例外ではない。それもまた可能なものの連続体(continuum des possibles)の一部であり、その両端のいずれかに現れる可能性が高い。よく知られた「例外的な正規」という概念は、周縁にあるなにか神秘的なものを映し出しているのではなく、この原則の表現にほかならないのである。実際のところ、このような極端な形態に注目することは、しばしば方法論的に非常に価値がある。というのも、それはモデルの両極を定義するのに役立つため、研究対象となる形態が配置される幅についてのより具体的な考えを得られるからである。

○変化の源泉としてのミクロな次元

- ・バルトはミクロな次元こそが社会的変化の源泉であると考えている。このことは、彼が「相違・多様性」(diversité)を重視していることと関係がある。バルトにとって、社会生活とは一貫したものではなく、諸々の差異(différentiels)から構成されたものであり、こうしたそれぞれの差異が変化の可能性を与えてくれる。
- ・はじめのうちはマイナーで広まっていない革新でも、それを普及させ制度化することを可能にしてくれるのは、このような差異なのである。そして、このメカニズムによってこそ、ミクロからマクロへの移行、より正確に言えば、ミクロからマクロへの絶えざる構築が行われる。

○生成的アプローチにおける統計の使い方

- ・バルトによれば、研究者は構築した生成モデルの妥当性(validité)を確かめなければならない。
- ・バルトの立場はポパー的であると言えることができる。バルトは、提示されたモデルを反証の試みかけられるようにする必要があると考えている。ミクロストリアは、この点では必ずしもバルトと一致しておらず、妥当性の確認(validation)よりも反証(falsification)について進んで語ろうとはしない。しかしながら、ミクロストリアは妥当性の確認を重視することで、説明の上では歴史学を真の(veritable)実験科学に属するものとして扱うようになっている。
- ・この妥当性の確認の性質を理解するには、生成的アプローチとマクロ構造的アプローチにおける統計の使われ方を比較するのが役に立つ。マクロ構造的アプローチの考え方は古典統計学と似ている。観察の単位は原子として扱われ、互いに切り離され、あらかじめ定義された一元的な(monothétiques)カテゴリーの中にグループ化される。同時に、何らかのカテゴリーに属するということは、対象が何らかの本質的性質を持つということによって、ア・プリオリに、曖昧なところなく定義される。
- ・統計は典型的な多数派のケースで少数派のケースを含めた全体を「代表」させてしまうことにより少数派のケースを相対的に無視することになる。マクロ構造的アプローチでは、古典統計学に記述(description)、説明(explication)、妥当性の確認(validation)の役割

が同時に与えられる。

- ・それに対して、プロセス的アプローチでは、もっとも大きな集合だけでなく、すべてのケース（たとえ稀でユニークなものであっても）が考慮される。また、最頻の(modaux)ケースを観察しただけでは、システムを支配する規範の全体を見つけ出すことはできないと考えられる。そのため、プロセス的アプローチにおいて統計に説明の役割を与え続けることはできない。
- ・その代わりに、ミクロな観察で収集した事実に適合する指標が構築できれば、統計はプロセス的アプローチの妥当性を確認する役割を保持することができる。限られた数のケースの「質的」な観察から、分析の最終目標たる一般化の可能性に移行するという点で、この次元は非常に重要なのである。

○結論

- ・バルトの研究は、ミクロストリアの特徴や目的を理解するのに役立つ。これにより、「多角的アプローチ」とイタリアのミクロストリアとの根本的な違いを明らかにすることができる。ミクロストリアにおいて、もっとも細かい分析のスケールを体系的に採用することは、可能な実験の中の一つに対応するものでもなければ、異化作用を生み出そうという単純な願望の表れでもない。このアプローチは、現実を生み出すメカニズムを可能な限り網羅的に説明したいという欲求から生じているのである。
- ・ミクロストリアは、このように実証主義的な研究と、因果関係の連鎖を再構築できる可能性への信頼に基づいている。より正確には、「新実証主義」と言うべきであろう。歴史家が再構築しようとなければならないのは、もはや「実際に起こったこと」ではなく、「起こったことを生み出したすべて、あるいは起こり得たすべて」なのである。